

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 王墓から喜岡城へ歩く

講 師 藤井 雄三

(高松市教育委員会教育部 文化財課長)

平成23年 6月26日(日)

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 神櫛王墓

南海治乱記に「高松の東に大稜あり」とあり、全讃史に「王墓は津の村の東に在り云々、二立石有り・・・中略・・・蓋し神櫛王之墓也云々」とある。伝えるところによれば、大墓、青墓といわれており、江戸時代の末期には、近傍の住民の墓地となっていた。

明治二年（一八六九）四月、古高松村の揚行蔵という者が高松藩の執政職にあった松崎渋谷衛門を訪ねて「古高松村に古くより王墓と称える場所があつて小石碑がある。神櫛王の御陵と聞いている」と述べた。

それを聞いた渋谷衛門は崇敬の念を表し、直ちに村人の墳墓を移転させ、柵を設けるなど陵墓に相応しい姿に再修することにした。五月、神祇官の許可が高松藩知事松平頼聰に降り、着工、まず、住民の墳墓を移し、神櫛王の墓として整備を行った。明治五年九月落成、松岡調が祭典にあたっている。

神櫛王（かむくしのみこ・かみくしのみこ、生没年不詳）は、第十二代景行天皇の第十七皇子。神櫛皇子・神櫛別命（わけのみこと）ともいう。『日本書紀』によれば、母は五十



河媛（いかわひめ）。『古事記』では、母を針間之伊那毘能大郎女（播磨稻日大郎姫）とする。

讃岐国造（讃岐公）・紀伊国の酒部阿比古（さかべのあびこ）・宇陀酒部・酒部公の祖で、国造族の子孫は寒川・植田・高松・神内・三谷・十河などの氏を名乗ったという。

高松市由良町の清水神社、坂出市府中町の城山神社、琴平町の櫛梨神社等で祭神として祀られている。

香川県に伝わる讃留霊王（さるれお）伝説によれば、景行天皇二十三年に讃留霊王が勅命を受け、瀬戸内の悪魚退治のために讃岐入りし、その地に留まって、仲哀天皇八年九月十五日に百二十五歳で薨去したという。この讃留霊王について、東讃では神櫛王のこととしているが、西讃では武卵王（たけかいごのみこ。日本武尊の子）のことといわれている。

2 佐藤継信の墓

神櫛王墓南隣にある。もともと平田池の場所にあったが、正保二年（一六四五）に池が築造されたときに現在の場所に移された。

墓域が現在の姿となったのは昭和六年（一九三一）で、継信（つぐのぶ）三十世の孫・佐藤信古が土地を購入し大修築を加え、現況



のようにした。土地は佐藤氏の所有地であり、管理は牟礼町から引き継いで高松市が行っている。

敷地内には継信の墓に擬せられる五輪塔があり、その前に「佐藤次信墓」と記載された標石がある。標石は松平頼重によって寛永二十年（一六四三）建てられた。

なお、墓が移された時に土中から太刀が出土した。刀は所有が点々としたのち志度寺に寄贈されたことが、高松の藩儒後藤芝山によって記録されている。

太夫黒墓

松平頼重によって建てられた標石の表面には「太夫黒馬埋處」と刻まれ、裏面には継信墓と同じく、寛永二十年と書かれている。

太夫黒とは、源義経が後白河法皇から賜った馬。一の谷合戦で義経を乗せ断崖をかけおりた名馬である。義経は、自分の身代わりとなって戦死した佐藤継信の供養のために、志度寺の覚阿上人に寄贈したといわれ、その後、志度寺に飼われていた太夫黒は、ある日、行方がわからなくなり、継信の墓の前に倒れていたと伝えられている。

佐藤継信墓道碑

柴野新八等、五名の発起人によって建てられた碑。撰文並びに書は林董である。林は明治二十一年（一八八八）十二月三日に香川県知事に就任しており、碑の日付が翌年の三月

であることから、急ピッチで建てられた碑であることがうかがえる。

佐藤氏念祖碑

敷地の中央に立つ石碑。佐藤信古によって建てられた。佐藤継信の出自から、屋島での義経の身代わりとなつての討死のこと、その後、平泉に落ちた義経が遺族を訪ねた物語や、浮き沈みのあつた継信の子孫の歴史、信古による継信墓の整備の経緯等が、刻まれている。

題字の篆額は、徳川家第十六代徳川家達、撰文は牧野謙、書は宮島大八である。

鎌田兵衛尉疑塚碑

鎌田兵衛尉光政は、継信とともに義経四天王に数えられる。継信と同じく屋島において戦死するが、その実績はあまり知られていない。

そのことを憂いた佐藤信古は、碑を建てることによって、鎌田兵衛尉を顕彰した。なお、敷地北西隅の五輪塔は鎌田兵衛尉疑塚とされている。

佐藤継信と佐藤氏

佐藤 継信は平安時代末期の武将。『源平盛衰記』では弟・忠信とともに義経四天王に数



えられる。奥州藤原氏の家臣・佐藤基治の子。母は藤原清綱の娘。諱を嗣信とも書く、次信の表記もある。

佐藤氏は、鎮守府將軍藤原秀郷より六世の孫公清にはじまる。西行となのった佐藤義清は公清の曾孫である。

継信・忠信兄弟の祖は、平泉の藤原基衡の家臣となり信夫郡（しのぶぐん／福島盆地地域の西半分にあたる）、現在の飯坂温泉（福島県福島市飯坂町）付近を根拠地としていた。

3 長刀泉

道脇にある古井戸・・・石で組まれた長方形の泉・・・を長刀（なぎなた）泉という。「三代物語」に「武蔵坊弁慶長刀の石突を以って、井を穿つ、しばらくして清水湧く」とあり、源氏軍が炊事のために困って掘った井戸と伝えられている。

なお、長刀とは薙刀とも書き、日本の長柄武器の一種で平安時代に登場した武具である。長巻というよく似た武具もあるが、基本的には別物と考えられる。石突とは長刀を着装した柄の先、長刀の反対側につく装具。

4 菜切地藏

源平合戦のおり、弁慶が近くにあった地藏の背中をまな板がわりに大長刀を包丁がわりにして、菜っ葉を切って汁をこしらえたと伝えられている。そのことから菜切の地名が起

こった。王墓の南方一帯の集落を菜切という。

「全讃史」には、このとき義経が「弁慶がこしらえし菜は武蔵坊」といえば、弁慶が「それを知りつつ九郎判官」と返したと記述されている。

丘上にある堂の中央正面には地藏菩薩、左に十一面観音菩薩の石像、右には五輪塔等の部材を組んだ石造物が祀られている。地元では、この石造物を菜切地藏としている。ただし、菜切地藏は早くに阿波の方へ移されたとの口伝がある。

5 八坂神社

当社の祭神は須佐之男命である。喜岡寺の前身であった浄光院の鎮守として勧請されたというが、詳細は不明である。昔は境内に樹木が生い茂っており、祇園林といわれた。



津ノ村

寛永年間（一六二四～四四）の讃岐国絵図によれば、古高松郷は、古高松、東片本、赤羽崎、浦生、新田、友久、小山、中谷、津村の九つの村で構成されていた（日本歴史地名大系第三十八巻 香川県の地名）。このうちの津村が、津ノ村にあたるものと思われる。

津ノ村との地名から、港があつたとする説がある。

武例高松の松原

この松原は、屋島の南東麓にあつたという。『前太平記』に、天慶三年（九四〇）、藤原純友追討の大將として左衛門佐（すけ）藤原倫実が下向したが、備前国釜ガ島の戦に敗れて讃岐に退き、讃岐介（すけ）国風と協力し、三千余騎をもって武例高松の松原に陣を取つた。

官軍は純友の軍勢と激戦を繰り返した末、遂に勝利を得、純友を備前に敗走させた。

6 高松城（喜岡城）跡

高松城は喜岡城とも呼ばれ、高松町永ノ谷、現在の喜岡寺境内を本丸とし、外郭一帯を城地とした城で、南北朝時代の建武二年（一三三五）、船木頼重が讃岐守護職に補せられた時、讃岐一国を治めるために高松城を本拠地とした。以後消長はあつたが、引き続き船

木氏・・・後に高松氏を名乗る・・・の子孫が在城した。

同年、頼重は、足利尊氏方の北朝方の将・細川定禅と屋島山麓で戦って敗れ、多くの一族郎党が討ち死にし、高松城も落城したといわれている。

その後裔―左馬助頼邑は、天正十三年（一五八五）、豊臣秀吉が派遣した四国平定の大軍と戦って、応援の将・片山志摩俊秀・唐人弾正弘武をはじめ城兵二百余人と共に壮烈な戦死を遂げ、城は再び落城した。

廃城の後、東方にあった浄光院を城跡に移し、喜岡寺と称した。



喜岡寺

不動明王を本尊とする寺で、真言宗御室派に属する。高松城跡に造られた寺院として知られる。『紫雲山極楽寺記』に「天長六年（八二九）秋九月、建仏寺高松喜岡寺本尊観音」とあるのは、この寺の前身か。

さらに『讃岐名勝図絵』に「文禄年中（一五九二〜九六）、高松頼重の後裔、堂宇を修理し、もつて香花院となす」とあり、『讃州府誌』には「・・・浄光院と称し、高松家の香花院なりしを永禄年中（一五五八〜七〇）、今の地に移し、大いに経営せり」とある。

『寺伝』によると、「第八十六代後堀河天皇の寛喜元年（一二二九）僧・覚行の開基にして、初めは常光寺（浄光院）と称し、ここより東北の平地にあり。中ごろ細川顕信、深く当寺の本尊をご信仰あり。乱世におよび堂宇ことごとく兵火にかかりて焼亡し、あまつさえ古文書・宝物等まで亡失して、往時追憶の便さえなきに至れり。しかるに文禄三年（一五九四）に至り、郷内の総檀那ら相謀りて再建し、のち喜岡城跡に移して、今の寺号「喜岡寺」に改めたり」とある。

境内には、高松左馬之助頼邑、片山志摩俊秀、唐人弾正弘武の三



将の墓がある。

また、安永三年（一七七四）、付近から喜岡城の鬼瓦が発見された。それには「長祿三年（一四五九）七月廿日 大工太郎左衛門」と刻まれている。この瓦は、藩主・松平家に献上されたが、明治四年（一八七一）に石清尾八幡神社に寄進され、現在も同社に保存されている。

喜岡権現社

喜岡寺の東隣に鎮座する神社。祭神は蔵王（ざおう）権現。由緒は不詳であるが、次のような話が伝えられている。

藩政時代には、境内に大木が生い茂り、たくさんの鶴が飛んできていて、秋空に群舞するさまは壮観であった。高松藩では、鶴を保護して殺生禁断の地とし、里人は、権現さまのお使いであると信じて大切にしていたという。

7 鞍掛松

JR屋島駅から北へ進むと、旧道の北側、地藏堂の傍らに松の木があつて「鞍掛松」と呼ばれている。

「義経の軍勢が、阿波から強行軍で屋島に向かったとき、人馬の

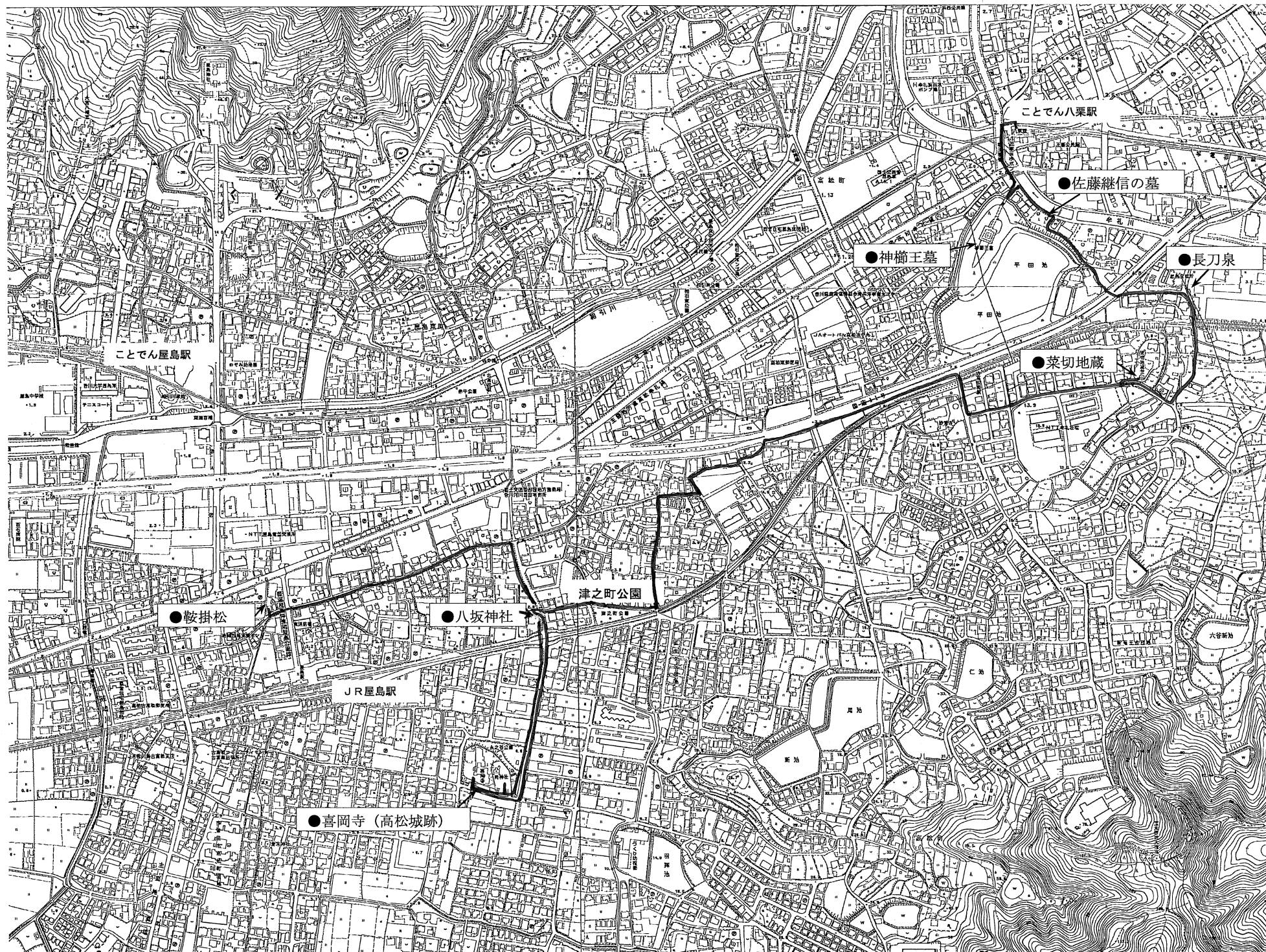


疲労が甚だしかつたので、この松に鞍を掛けて人馬を休養させた所である」と伝えられている。今の松は、源平合戦当時のものとは思われない。何代目かであろう。屋島の行宮（あんぐう）襲撃のため、源氏方の支隊が赤牛崎方面を指して、相引の海に馬を乗り入れたのも、この付近からであろう。

【参考文献】

『古高松郷土史』昭和五十二年二月二十八日発行 古高松郷土史編集委員会

『牟礼町史』平成五年三月二十日 牟礼町発行



6月26日（日） 屋島～古高松

JR 高德線

JR 屋島駅

（上り高松方面）12：26 発 （→12：41 JR 高松駅）

（下り徳島方面）12：24 発 （→12：35 JR 志度駅）

琴電志度線

琴電屋島駅

（上り瓦町方面）12：21 発 （→12：35 瓦町駅）

（下り志度方面）12：21 発 （→12：40 琴電志度駅）

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 由良山周辺を訪ねる

と き 平成23年9月25日（日）

9：30～12：00



集合場所 清水神社（ことでんバス由良バス停から西へ200m）

講師 大嶋 和則（高松市教育委員会文化財専門員）

☆広報「たかまつ」9月15日号に開催案内を掲載しますので、
ご覧ください。

☆天候等により中止の場合のみ文化財課（TEL 839-2660
「午前7時～開始時間まで」）でお知らせします。
（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★集合場所への交通案内★-----

ことでんバス【65】 レインボー・サンメッセ 川島・フジグラン十川行き】
瓦町・天満屋バス停 由良バス停
8：30 → 8：56

ことでんバス【63】 サンメッセ・西植田行き】
瓦町・天満屋バス停 由良バス停
8：49 → 9：12

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょ
う。
(必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道
路の端を一行で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気
をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。